1963.11. GANEFO THE Ⅰの思い出

吉田　稔（76歳）
（法政大学出身）

“ＧＡＮＥＦＯ　ＴＨＥ　Ⅰ”　私の周囲で誰一人知る人が居ないこの大会！

世界が大きく変り始めようとしていた、ちょうど５０年前のこの時期、ジャカルタ大会を第１回とし、第２回が無かった新興国スポーツ大会は幻のオリンピックとでも言える大会で、自由圏と共産圏が対立していた当時の世界情勢を物語る象徴的な大会であったように思う。それだけに翌年に控えた東京オリンピックの成功を願う日本の各競技連盟の考えは、国際競技連盟傘下の立場を貫き、アジア諸国との外交問題を無視して、この大会への参加に猛反対したものであった。が、その反対を押切り参加した経緯については先年他界した菅久君の手記に、詳しく記されているから今更書加えることもなし、さればすっかり忘れていた記憶を、当時の写真を引っ張り出し、ジャカルタでの思い出を辿って見た。

先ずは、準備のために借りたアパートをアジトにして幾度か集まって打合せをしたこと。出発の前日は浜松町の旅館に泊ったこと。
ジャカルタまでの飛行機はプロペラ機で、香港、マニラ経由でジャカルタ到着が真夜中であったこと。空港から選手村までのバスからは街に並んで歓迎してくれる現地の人々の顔が黒くて、やけに眼だけがギラギラ光っていたのが印象的だった。日本では練習場がないため、会期より１０日ほど早く現地入りした我々は、連日選手村から練習場へバスで通ったが、その途中のジャカルタの街は赤茶色の川とその川で洗濯し、水浴びをする人々。少し離れたところでは、側道から流れ込む側溝にまたがりしゃがんで用を足しつつバスに手を振る人達。全く東京での生活では想像もできないほど、あまりにもかけ離れた状況に驚いたものだった。

選手村でのショッピングはルピアで、１ドル￥３６０レートで持っていったドルをインドネシアの選手たちに頼んでオフィシャルより数倍高い１,０００ルピアで闇交換をし、お土産を買ったものだった。

日本ブランドはキャノン、ニコン、ソニーがトップ。現地は短波放送にもかかわらず、短波が入るサンヨー製より長波しか入らないソニーの方が、人気があり、汗まみれのランニングシャツやティッシュペーパーがご当地彫刻の仏像等、民芸品等との交換対象として人気があった。中でも使い古した折たたみ傘は、折りたたみのところに少し穴が開いているものであっても、各選手村を渡り歩くアラブの商人（選手だが）たちの間では人気があった。

選手村での生活は、下着類を毎日洗濯しなければならないほど汗をかき、蚊に刺された後など、掻き傷にいつの間にか蝿が止まるなど、非衛生きわまりない状態であったし、ほんのり茶色がかった水道水のせいか、下着は洗濯のたび、日毎に茶色っぽくなっていった。

田中、中山、私の担当部屋ＢＯＹ（名前は忘れたが）に梅干をあげたときのことである。彼は躊躇なくいきなり口に放り込んだものだから、あのスッパさに驚いた顔は未だに忘れ難い。彼には気の毒なことをしたが、後で羊羹をあげたときには、口にしようとしないので、食べて見せても決して口には入れなかった。

試合場のことは皆が知っている通りで、惜しくも金メダルを逃したが、結果オーライであったように思っている。負け惜しみではないが、インドネシア、ナショナルチームの祖国に対する面目が立ったわけだから、もし我々が勝っていたら、風当りはどこかできつくなっていたかも知れない。

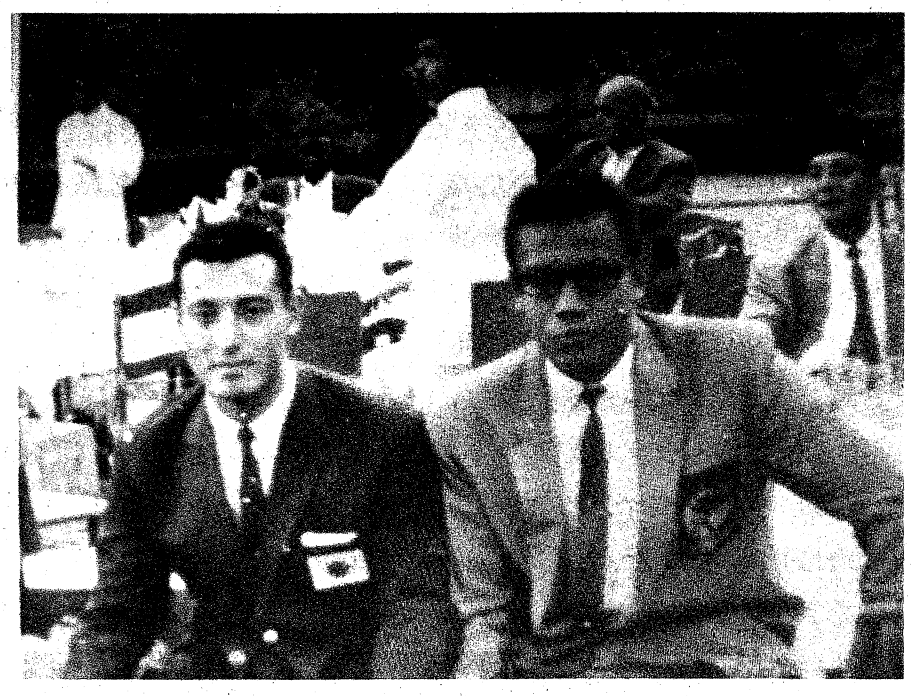
試合後、インドネシアチームと芝生の広場でミーティングをしたとき、双方代表で乾杯をすることになり、日本代表として私が出ることになった。酒はジョニ赤、当時としては涎が出そうな一品である。日本では当時一本￥６,０００～￥８,０００ぐらいはしていただろうか。互いに右腕を絡ませて持ったコップになみなみと注がれ、これを飲干すのだが、一杯で終りと思いきや、２杯、３杯と・・・・要するに飲み比べである。これには参ったが腹を決めて試合の雪辱とばかりに挑戦し、６杯目を注がれたときに相手がダウン。私はそれを飲みきって勝ったわけだが、翌朝レストランに朝食をしに行ったとき、インドネシアの連中が驚いた顔をしているので聞くと、彼の選手は今朝くたばっている由、そのとき以来、ストロングと言うあだ名を授かった。多分連日のごとく疲労回復のために飲んでいたグロンサンのお蔭かも知れないが、最近なら完全にドーピングでアウトであろう。

左 私（吉田）　隣 スリー・ハルディニー嬢

現地ではマルワタ氏（慶応の留学生）の自宅へ行った時に出されたバナナのおいしかったこと。競技プールでの世話役であったスリー・ハルディニー嬢の家へ、インドネシアチームのフルバックのユスロンラミジ君の案内で行ったとき、次々と出てきた彼女の兄弟姉妹が６人程、彼女の別の母親の家に行くと又６人と言った具合で、彼女のところは第２婦人までだったが、彼の国では第４夫人まで許されるとのことだったから、父親は大変だと驚いたものである。ユスロンラミジ君とは妙に気があって、帰る際には彼の真黄色のユニフォームと私の真白なユニフォームをお互いサインをして交換し、帰国後１０年以上も部屋着として着用していた。

日本大使館でのおにぎりと味噌汁の美味かったこと、ボゴールやバンドン、パサバルー等々各地を見学し、バンコク、香港経由で帰国。

期間中、ケネディー大統領の暗殺事件があった。当時私は証券会社に在籍していたので、ケネディーショックなる株の大暴落を遠くから見ていられたことは幸いであった。



私（吉田）　　ユスロンラミジ君

あれから５０年、ベルリンの壁は取除かれ、オリンピックの壁もなくなり世界は大きく変り、日本もバブルからデフレと大きい経済変動を経て、ようやく安定に向かい始めた今、アメリカから元大統領の娘のキャロライン・ケネディー大使を送りこんできたことなどを考えると、なんだか１９６３年が世界の変り始めの年であったような気がしてならない。そしてその年、我々は日本のアジア外交の小さな礎になったのではないだろうか。あの青春の一ヶ月が私の中で大きな存在として残っているのは、そんな所にあるような気がするのである。

2013 年 11 月 21 日、ＧＡＮＥＦＯ、50 周年記念をひらくにあたり、小生の我儘を聞いて頂き、日程を設定していただいた事、誠に感謝に耐えない。

お陰さまで、50 年のタイムスリップを体験し、この先大きな思い出として残り続けるであろう。

菅久君を始め、3 名が他界した今、残ったものにとっては寂しい限りだが、彼らのご冥福を心よりお祈りする。

そして、これからの人生、生きている限り存分に楽しみながら、少しは誰かのために何かをした、と言える日を送りたいと思っている。

ボゴール公園の大蝙蝠（大コウモリは,羽の幅が１ｍ強ある）の大群